

C—30 江戸時代における裁縫教育について(第2報)
—「絹布裁要」第九尺積法の解明—

郡山女大家政 関口 富左

1. さきに被服工作技術は知能等諸性能及び、性格特性との諸要因により習得，施工されることを明らかにしたが，さらにこのことの実証的究明を日本教育史上に求め，事例的解明を試みるため，文献等により江戸時代における裁縫教育の実状を探り，これが論証に及ぶものである。

2. (A) 江戸時代における単行本として現存する裁縫技術書類の検討(第1報，東北，北海道支部総会発表第2報本回以下数次)

(B) 江戸時代における裁縫に関する一般書の検討

(C) 江戸時代における女子教育関係書の検討

今回は(A)の「絹布裁要」の尺積法等について算法的思考の解明と検討

3. 被服工作技術の施工においては、算数能力との高相関を示したが、著者正木政幹は裁縫を算法的思考のもとに統一分類して「絹布裁要」を編さん考案している、特に四十一丁表より五十二丁終に至る第六、第七、第八、第九は顕著である。第九、尺積法は当時の工女の数理概念、空間理解及び計算能力の練磨に見るべきものが多く、和服裁縫積り方の思考理念はこの時を始めとする（1751年代）ことがわかる。即ち、裁縫と算数能力との関係を知るにあまりあろう。